

故 成川正晃教授を偲んで

成川正晃教授が逝去されたと報せを受けたとき、あまりにも突然のことで私にはわかには信じることができなかった。成川教授は、私が2020年3月末に定年退職した翌日に本学に赴任された。会計学教員による私の送別会は、新型コロナウイルス蔓延のため急遽中止されたが、状況が落ち着いたら新任の成川教授と私の合同の歓送迎会が開かれるだろうと期待していた。そして日本の大学における会計研究教育について成川教授と意見を交わしたいと望んでいた。しかしその希望が実現することはなかった。ここでは、成川正晃教授の人柄と会計教育・研究の業績を偲んでみたい。

明治大学商学部で会計学を学んだ成川教授は、大学院への進学を考えておられたが、ゼミの指導教員である木村栄吉教授からの推薦もあったのであろう、1984年4月に本学の大学院修士課程に進学して久木田重和教授の指導を受けることになった。ちょうど同じときに私は本学に経営学部助教授として赴任した。成川教授は修士課程修了後、専門学校および短期大学と四年制大学で講師、助教授、教授として教育研究を続けられ、本学に専任教員として迎えられることになる。成川教授は2008年4月から3年間、大学教員を務める傍ら本学大学院博士後期課程に在籍し、「収益認識基準」の研究に取り組んでおられる。

成川教授は、会計学の学会活動にも力を注がれた。日本簿記学会、日本会計研究学会をはじめ、会計のさまざまな分野の学会に所属し、会計学の発展に寄与された。2022年4月14日の告別式には、コロナのため自粛が要請されるなかで本学関係者以外に他大学から数多くの会計研究者が駆けつけ、各学会で成川教授がいかに高く評価され信頼されていたかを知ることができた。

成川教授は学生からも慕われている。本学の学部と大学院を卒業し、税理士として活躍しているOB二人が銀座のレストランで成川教授就任決定の祝賀会を開いてくれたことがある。私もその会に招かれ、四人でよく飲みよく語り合った。成川教授は心底うれしい、楽しいという表情をされていた。

成川教授は「丁寧に生きる人」であった。人と物と組織を大切に生きてこられた。美意識も高かった。建築の設計の世界では「神は細部に宿る」と言われるが、簿記会計の世界でも同様である。経済事象を記録することから始まる会計では、罫線を含め記録そのものを構成する要素の一つひとつがこの世界の真髄となる。簿記における罫線に関する成川教授の論考に触れたとき、この方は簿記会計を深く愛し、その細部に宿る真髄から始めて全体像を描ききることのできる人だと私は思った。

本学の会計教育は建学以来120年を超える伝統をもつ。その歴史を新たに創る担い手として成川正晃教授を本学にお迎えできたこと、そして多くの貢献をいただいたことを、関係するすべての方々とともに誇りにしたいと思う。

陣内良昭